

印象 10 編 — 6 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

● うすしか ●  
ざっさざっさと  
落ち葉を踏む子  
ざっさざっさと  
戦争に行く

\* 最初の「ざっさざっさと」は落ち葉踏  
みで遊ぶ子どもが出して楽しむ音だが、  
後の「ざっさざっさと」は出兵式の隊列  
の音のようである。同じ音に表現する中  
に、作者の批評意識はある。「戦争が廊  
下の奥にたつてゐた」（渡辺白泉）があ  
る。こんなふうにして「戦時」は訪れる  
のであろう。

● うすしか ●  
カマキリの結婚式を挙げる姪

\* 小学校低学年か幼稚園・保育所に通う  
くらいの年齢の姪ごさんだろう。遊び、  
いわばママゴトの範疇である。しかし、  
カマキリを怖い昆虫とはせずに（恐らく  
可愛い）、かつ結婚式というセレモニー  
をするのは、甥の遊びには現れないもの  
だろう。微妙な成長期の美しいショット

の よう に 見 え る 。

● 神 無 月 風 夜 ●

吃 音 で  
人 見 知 り で  
緘 黙 症 で す が  
言 葉 の 力 を 信 じ て 生 き て る

\* 「が」と逆接で結ぶ中に、作者の対社会へのデリケートな心のさまが感じられる。おそらく、作者にとっては対社会的な言葉との逆接の比較よりも、絶対的に自身の心の中で動く言葉の方に意味があるだろう。その言葉によって自分を支えていることを誰よりも知っている強さがある。

● 細 村 星 一 郎 ●

海 月 の 子 ミ サ の 火 種 の よ う に 浮 く

\* 水族館の海月であろうか。暗い照明の中に発光する小さなクラゲ。どこか儼かなミサの火めいて見えてくるのだ。

● 阿 部 圭 吾 ●

生 活 に 詩 は 宿 る か ら  
目 薬 を  
点 せ ば あ な た に 出 来 る 湖

\* 「たっぷりと眞水を抱きてしずもれる

昏き器を近江と言えり」(河野裕子)を  
思い出す。目薬を溜めた上向きに見開か  
れた「あなた」の目が、小さな湖となっ  
て、生活の詩を溜めている。

● 合川 秋穂 ●

足の形くらべあって  
もう夏なんだね

\* 夏は素足の季節。小さい頃の回想か。  
もちろん、いまでもかまわない。指の露  
出した夏の靴を履いているもの同士のた  
わいない会話であり、気づきであるか。  
しかし、それは夏を実感するための行為  
のようである。

● 細村 星一郎 ●

梅雨の星  
キリンの濡れた目のなかに

\* 抒情的なキリンの姿は作者を投影した  
ものだろう。「濡れた目」は涙とも美し  
い輝きともとれる。「梅雨の星」は救済  
の輝きか。詩の言葉の最初は自己救済だ  
ろうから。

● 藤色 ●

とおくに行きたいと思った  
やたら柔らかいバナナをむくとき

\* 現実逃避とまでは言わないであろう。「やたら」に柔らかくなりすぎたバナナの違和感が描かれる。小さな違和感が日常の心に小波を立てている。

● 桜望子 ●

純白の躑躅ばかりが植えられて  
病院へ続く道の静けさ

\* 大きな総合病院の中の道か。植栽のツツジが白い花を咲かせている。静かな午後（病院の面会は午後に設定されていることが多い）、親族か知人の見舞いに向かう道に「私」はいるのだろう。神聖な「生」に近づく思いが漂う。

● 門野あおい ●

それぞれの午後が  
レモン水に反射している

\* 喫茶店のテーブルに置かれたレモン水に、様々な人の午後の一時間が映り込んでいる。あるいは、公園のベンチで呑まれるペットボトルか。それぞれの行き過ぎる一瞬が煌めいて映り込んでいるのだ。定点観測のような輝きがある。

・ 投句数は減じている。選ぶ側の力不足も反映してるかもしれない。ただ、精一

杯読むことしかできない。心したい。

これには私の目が慣れてきて、既視感の強い作品に見えてきてしまっていることもあるかもしれない。これは作者の問題よりも、当方の問題だろうが、かつて俳人の正木ゆう子氏が選句の基準を、見たことがない句と述べていたのを心に止めている。読む者にとっては、やはり新鮮な思いの驚きが欠かせないことも事実である。

しかし、心に残る作品が減じた訳ではない。今回もご覧のような10編を選ぶことができた。